

終章

一

前方で王城の尖塔が朝日を弾いた。

薄紫の夜明けが東へと後退していく空に、小山のような王都の影が現れ、見る間に視界に迫るように近づいて来る。周囲を囲む広大な森の中に浮かび上がる巨大な都、アル・デイ・シウム。

そこに、王が座す。

様々な想いが心の裡を過ぎる。ただその多くは、温もりを伴うものだ。

レオアリスは大きく息を吸い込み、静かに吐き出した。

随分と久しぶりに戻ってきた気がする。

急かす心のままに飛竜を駆ろうとして、王都の上空を旋回する複数の飛竜の姿があるのに気付く。レオアリスは手綱を引き速度を緩めた。真横から差す太陽の日差しに、飛竜達の姿は濃い影のようだ。やや遅れて、ロットバルトが乗騎を寄せる。

「こんな早くに……何かあったのか」

「カイは戻った時、何も告げはしなかったのでしょうか？」

「特にはな」

レオアリスの使い魔は、村を出る時に帰都を知らせずに飛ばしたが、取り立てて異変を知らせてはいない。

ただ、このところ立て続けに軍が動いている。バインドの件が終わったとは言え、早朝から飛竜が王都の上空を旋回している事に、少なからず緊迫感を覚えた。

「どの隊だ？」

この間にも、王都はゆっくりと目前に近づいて来る。ロットバルトは蒼い瞳を細めて次第にはつきりしてくる王都の上空を透かし見た。

「――師団ですわね」

「師団？何で上を飛んでんだ。訓練は予定して無いだろ」

何か緊急の案件でもあったのかと、レオアリスがハヤテを急がせようとした時、彼方の飛竜が一騎、二人に気付いたのか、速度を上げ近づいて来た。

それを合図に、北の演習場から飛竜の一隊が一斉に上昇する。飛竜に驚いた鳥達が周囲の木立から追われるように羽ばたき、騒然と羽音を響かせた。

「何――」

飛竜の黒い鱗が陽光を弾き、黒雲のように王都の北側の空を埋めている。

飛竜の上に立てた棚引く旗は黒地に暗紅色の双頭の蛇、紛れもない近衛師団の軍旗だ。

飛竜を駆る騎手の姿が肉眼で捉えられる程に近づき、レオアリスは身を乗り出した。

「一隊……」

先頭の飛竜の上に立るのはグランズレイだ。クライフの中軍がそのすぐ背後に続き、左右にそれぞれ、フレイザーとヴィルトールの左右軍が展開している。

「――ほぼ、一隊全騎じゃねえか……」

「そのようですね。ただ離脱もその後の飛空も乱れが無い。見事な編隊ですよ。儀礼の際の空域展開の見本だな」

今度の御前演習に取り入れましょうか、と感心したように口元に手をあてたまま、ロットバルトはレオアリスに瞳を向けた。

「いや、お前、何をのんきに……」

レオアリスが驚きを通り越して、呆れた声を上げる。全隊がこうして動く事など通常ではほぼ有り得ないのだが、第一大隊の飛竜は一糸乱れぬ編隊のまま次々に飛来すると、レオアリス達の周囲に滑り込むようにぐるりと取り巻いた。

黒旗が風に靡き、音を立ててうねる。

呆気に取られてハヤテの上に立ち尽くしているレオアリスの前で、グラ

ンスレイが飛竜の上に立ったまま、深く上体を折る。

フレイザー、クライフ、ヴィルトール、そして第一大隊の将校と隊士達が、一斉に敬礼を向けた。

「ご無事の帰還、お慶び申し上げます、大将」

グランスレイの低い声が、静まり返った大気に溶ける。

二、三度口をばくばくと動かしてから漸く現状を飲み込み、レオアリスは顔に血を昇らせた。

この為だけに、早朝にもかかわらず彼等はずっと待っていたのだ。

レオアリスはまだ顔を赤くしたまま一度俯き、再び顔を上げて彼等を見回した。

「——今、戻った」

黒雲のように密集した飛竜達の上から、大きな歓声が上がった。

「こういう場合、将校は兵に対し手を振るなどして応えるのが慣例ですよ」「手……?」

手を振って応えるというと、祝祭などの折に王や高位の貴族がやるあれだ。優雅で華やかな印象が強く、王やアヴァロンが行う場合は威厳に満ちている。レオアリスには一番苦手な分野だ。

「……いや……俺にはちよつと……」

「慣例、というよりは、一軍の将としての義務ですね。兵の士気を上げるも落とすも、上に立つ者次第でしょう。まあ一言演説されるという手もありますか」

「ぎ、義務……? 演……——」

実際は剣を挙げて応えて見せれば、それだけで十分なのだが、義務と言われてレオアリスは真剣に眉を蹙めて考え込んだ。

ロットバルトは考え込んでいるレオアリスの横を離れると、正面のグランスレイへ乗騎を寄せた。第一大隊全軍を動かす許可を、誰が出したのかと、その点が気にかかる。

この件に関して、王は軍を動かす事を禁じている。バインドを討った以上、既にその範疇ではないにしろ、緊急時でもなく大隊全騎を動かす事は、

許可がなくては出来ないはずだった。

歓声はまだ続いていて声は聞き取りにくかったが、グランスレイは頷いた。

「アヴァロン閣下には、飛空演習を行うと申請して許可を戴いている」

グランスレイの顔に浮かんだ表情に、ロットバルトは苦笑を洩らした。

規律規則を重んじるグランスレイがこうした選択をするのは、かなり思い切ったはずだ。

「……何だ」

グランスレイが渋い顔でロットバルトを睨む。

「いえ。派手な演習ですが、たまには必要でしょう」

「——今回は、我々だけではなく」

口を無理に引き結んだままのグランスレイの声に重なるように、鋭く、だが朗らかな声が降り注いだ。

「剣士、レオアリス！ 良くぞ戻った。王はお待ちかねだ！」

上空に、磨き上げられた濃紺の鱗の飛竜が浮かんでいた。飛竜の青い瞳が挨拶をするように瞬く。レオアリスが言葉を発する前に、アスタロトがその上から、ひよいと顔を覗かせた。

「お前さあ、こういうところでがっちり固まっちゃってどうすんの？ 情けないね。もうちよつとばあーつと行けよ、ばあーつと。せつかく派手に迎えてやったんだからさあ」

華やかな面に、に、と笑みを広げ、アスタロトは手を振った。呆気に取られて言葉を失っていたレオアリスも返すように笑う。

「——何が派手だ。大体お前が何でこんなところにいるんだよ」

「だって、面白いじゃん。お前がどんなカッコいいこと言ってくれるのかと思つてさ」

悪戯っぽくけらけらと笑い、アスタロトはハヤテの上に飛び降りた。レオアリスの正面にふわりと浮かぶと、黒い艶髪が風に靡いて零れた。

握った拳でレオアリスの胸をトンと叩く。

「ほれ、応えてやれよ。皆朝っぱらからお前が何言うか楽しみにして来て

んだから」

「……」

ぐっと詰まり、レオアリスは周りを見回した。周囲の隊士達の顔には、レオアリスがどんな事を言うのか、半ば面白がっている表情が浮かんでいる。ここまで注目されると、余計何も出てこない。レオアリスは恨みがましい瞳を、にこやかに微笑むアスタロトに向けた。

「しよおがねえなあ。——上將！」

じれったそうな声と共に隊士達の中からクライフの飛竜が進み出ると、クライフはハヤテの上に飛び移った。主以外の者に乗られ、ハヤテが不機嫌そうに鋭く息を吐き出す。

「ちっと我慢してくれよ。お前のご主人の為だ」

クライフはハヤテへその声を掛け、レオアリスを肩に担ぎ上げる。

レオアリスは慌てふためいた声を上げたが、クライフは構わずぐるりと隊士達を見回した。

「バインドを討った剣士だ！ 俺達の大將だぜ！」

朗々としたクライフの声に重なるように、再び歓呼の声が響く。

クライフはレオアリスの顔を見上げ、カラカラと笑った。

「上將おっ、ほら、奴等に何か言っちゃってくださいよ」

レオアリスは赤面したまま何とか逃れる手は無いものかと周囲を見回したが、逆に期待に満ちた顔に迎えられ、やがて観念したかのように顔を引き締めるとハヤテの上に降り立った。

この位の責務は果たせて当然なのは確かだ。

アスタロトが期待に瞳を輝かせて、食い入るようにレオアリスを見つめている。

(くそ、何の期待だ)

レオアリスはその顔をじろりと睨み付けた。

(きつちり、格好いい事言ってやろうじゃねえか)

喉の調子を整える為、一度軽く咳払いして顔を上げる。

「い……」

「こ？」

じつとらそこにある全ての視線が集中する。どんな戦場にある時よりも、付け加えれば、王の前にある時よりも、緊張した。

(——やっぱ、何も出てこねえ……)

「……これからもよろしく……」

一瞬の沈黙が生じた中を、涼やかな風が吹き抜ける。

「史上稀に見る、迷言ですなえ」

「——少し厳しく、大將としての在り方を学んで戴かねば」

アスタロトの爆笑が、晴れ渡った空に響いた。

「良く戻った。バインドを見事討ち倒しての帰都、喜ばしい事だ」

王の声が、低く心地良く、そしてその場を圧する響きで、静かに流れる。高い位置に設けられた窓の飾り硝子から、複雑な色彩を帯びた光が玉座を浮かび上がらせるように降り注いでいる。

レオアリスは玉座の壇下に跪いたまま、顔を伏せ、王の声を聞いていた。湧き上がったくる喜びと、誇り。それらは心臓から送り出される血液に乗って、身体の間々まで行き渡るように感じられる。

この感情が、彼の言っていた、主を得るといふ事なのだろうか。結局、明確な答えをくれる者はいない。

それは自分自身で選ぶしかない感情だが、そうであれば、自分は既に選んでいるのだろう。

許されるなら、王に尋ねてみたい事がある。十七年前の事を。

何故あの時、自分を救い上げてくれたのか。名付けた、その理由を。

だが、王の上には常と変わらない表情があるだけだ。レオアリスは気持ちを抑え、深く頭を下げた。

「……月の末は演習があつたな」

「はい。御前に、披露させて頂きます」

一言、そう告げると、王は瞳を閉じた。

王都に戻ってからはひたすら慌ただしかった。

まずは正式な報告書を作成しなければならぬ。どこまで記載すべきかで、ロットバルトやグランズレイと何度か議論を交した。レオアリスは直接的にバインドと関わる事柄のみでいいと考えていたが、

ロットバルトは過去の経緯は一度明らかにしておく必要があると説き、グランズレイもそれに賛同した。

「それが誰にとつても真実となる訳ではありません。ですが、多方面からのものの見方は提示すべきでしょう。特にこの件に関しては、貴方は貴方の立場からの主張をいづれかの時点でしておくべきです。この先王都にあるなら、尚更必要な事です」

結局、実際の報告書へ追記として別に添える形で、その部分はロットバルトに任せた。自分ではどうしても感情が先に立ち、報告としての処理は出来そうにない。

軍議での口頭の報告も残っていた。報告は淡々と行なわれ、バインドの死に対して確認する二、三の質問を受けただけで、特に問題も挙がらなかった。

もとより四大公の立会いの上で王が下した決定に異論を差し挟む余地はなく、バインドを討つて戻ったのであれば、それ以上の議論もない。まだ完全に納得したとは言い難い表情を浮かべている者もあつたが、それも表立って取り沙汰される事は無かった。

ロットバルトが用意した答弁の資料もあまり聞く必要のないまま、彼等の反応には肩透かしを食らった気分さえ覚えたが、それでも正規軍副将のタウゼンが一連の軍議の終了を告げた時は、レオアリスもグランズレイも顔を見合わせ、開放感からほっと息を吐いた。

中断されていた御前演習の準備もまた再開された。

慌ただしく、しかし確実に、日常が戻ってくる。

ゆっくりと振り返る時間もないままに、演習訓練、演習会場の警備や王の警護と入退場に伴う導線の確保、列席する諸侯の警備、一般観覧者への対応と、日々すべき事は山積していく。近衛師団内での会議や正規軍との合同の会議、更に合同の演習も重なれば、ほとんど食事を取る暇さえ惜しいほど、誰もが慌しく動き回っていた。

バインドの一件で準備が滞っていた分、尚更立ち止まってはいられない。そうして、日数を数える間もなく、日々は過ぎた。

街路樹は金色に染まり、乾いた葉が枝から零れそうに揺れている。気の早いものは枝を離れて散り始め、路上の石畳に鮮やかな絨毯を敷き始めている。

早いもので、もう明日は御前演習が行われる日だ。正規軍、近衛師団の詰める第一層は、出陣前にも匹敵する慌ただしさに包まれていた。

最後の近衛師団全体の布陣演習を確認して執務室に戻ると、レオアリスは椅子にどさりと腰を下ろした。久しぶりに動くのを止めた気がする。

「――警備態勢も、演習の布陣も、閔兵の並びも、全部終わりだな？」
念を押すようにグランスレイを見ると、グランスレイも慌ただしき影を額に残したまま、力強く頷いた。

「後は午後の会議で全体の最終確認を行い、それで本日の案件は終了です」
グランスレイの言葉に、レオアリスは大きく息を吐き、椅子の背にぐったりと寄りかかった。ただ、闇雲に疲れている訳でもない。終着点のある慌ただしさは充足感も感じさせるものだ。

「明日か……」

明日は正午から始まり、王の高覧のもと、布陣演習、隊内の実戦演習、演武、閔兵と、数刻に渡って行われる。演武の中で、レオアリスの剣舞も予定されていた。

二刀を使うかどうか、それを少し迷っていた。剣の制御や演習場の状況を測った上で決めようと思っていたが、中々じっくりと考える時間も取れてはいない。

実際あれ以来、レオアリスはまだ剣を抜いてはいない。

完全に制御できるのかと自分に問えば、いま一つ確証が付け難かった。

レオアリスは束の間天井を仰いでいたが、一旦身体を背凭れに沈め、勢いをつけて椅子から立ち上がった。とにかく、この後の会議、近衛師団、

正規軍の揃う会議で取り敢えず最後だ。

「行ってくるか」

面倒なのは変わらないが、バインドの件を議論していた時よりはずっと気が楽だ。

「どうぞ、会議用の資料です」

扉へ向かうレオアリスへ資料を差し出し、ロットバルトは言葉を継いだ。

「会議が終了された後、お時間を戴いても？」

「予定は開いてるけど……めんどくさい案件じゃないだろうな。さすがにもう色々考えるのは遠慮したい」

ロットバルトは笑ってそれを否定する。

「では、王立文書宮へお越しください」

見せたいものがあるとそう言って、会議の時間が迫っているレオアリスを送り出す。

何があるのか尋ねようとも思ったが、なんとなく止めた。

外に出れば、日差しが暖かく中庭に注いでいる。吹き抜ける冷えた風も心地よい。レオアリスは青く晴れ渡っている空を振り仰ぎながら、束の間、遠く離れた故郷の雪を想った。

「参りましょう」

グランスレイに促され、レオアリスは視線を戻し慣れた中庭の景色を見渡すと、頷いて歩き出した。

御前演習の流れの最終確認だけでも関わらず、一つ一つの手順や事項を頭から追う様に確認していけば、会議が終了した頃には既に二刻が経過していた。太陽もかなり西に傾いている。

アスタロトが随分と真面目に参加していたのが印象的だと、そんな事を思いながら、レオアリスは王城の広間まで来るとグランスレイを振り返った。

「文書宮に行ってくる。かなり待たせたかもな。お前は どうする？」

「私は先に戻らせて戴きます。もう今日は公務はございません。ゆっくり休息をお取りください」

「グランスレイも身体を休めるよ。皆にもそう言っといてくれ」

グランスレイが頷き、一礼して王城の出口へ向かうのを確認し、レオアリスは王城の奥、王立文書宮へ向かった。廊下を暫く歩き中庭への扉を出ると、広い中庭に純白の花崗岩で造られた長い回廊が伸びている。

擦れ違う学院生達が、やけにさざめいている。彼等の会話の中に度々ヴェルナーの名前が交じるのを聞いて、レオアリスはロットバルトがつい一年ほど前まで王立学院の院生だった事を思い出した。まだ学院生達の間でも、話題に新しいようだ。

在席していた間、ずっと首席だったと聞いている。首席にありながら内務へ進まず軍へ入る事も極めて珍しい例で、今年の学院生達の進路に大きな選択肢となったとも。武の方が伴っている事が肝心だが、今後の参謀部候補が増えるのは、軍にとっても歓迎すべき事だ。

ともかくロットバルトが既に来ているのが判り、レオアリスは少し足を早めた。

王立文書宮の扉の横にロットバルトが寄りかかっているのを認め、片手を上げる。周囲を遠慮がちに囲んで立ち止まっている学院生達の姿に、どこも余り変わらないと苦笑を洩らした。

「悪い、少し長引いた。……待ったみたいだな」

ロットバルトが一礼し、面を上げる。

「私も今しがた来たところですよ」

「回廊からこつち、話で持ちきりだったぜ。ちよつと詳しく聞いてみたいよな」

「お聞きになるほどの価値はありませんよ。それより、会議は恙無く？」

「無事終わって、後は明日を待つだけだ」

レオアリスの面に浮かんだ苦い色に、ロットバルトは口元に笑みを刷いた。

「剣舞は？」

「……最後に回された。アヴァロン閣下の前だ」

不服、というより心底嫌がるような低い声に、ロットバルトはレオアリスの顔を同情と興味の入り交じった瞳で眺めた。

「——それはまた」

「有り得ねえ。普通に年功序列でいいじゃねえか。第一大隊なんだし、一番最初で。最初なら失敗しても演武が終わった頃には忘れてるよなあ」

「失敗の度合いにも寄りますがね」

総将の前など大舞台だ。そこへ本来の序列を無視して置くということは、まだ試す気持ちも全体的にあるのだろう。失敗すれば、またそれを理由にあれこれと批判も挙がる。

「二刀を披露されればいい。失敗しさえしなければ、批判の口を閉ざさせるいい機会になりますよ。それに今回の報告は既に上げていますから、期待は持たれていとお考えになった方がいいでしょう」

「……いつそ、おもいつきりぶん回すか」

「それで発散されるのもいいかもしれませんが。一応、修繕費は押さえてありますしね」

その言葉にレオアリスは隣を見上げた。

「……ちよつと参考に聞きたいんだけどさ。修繕費ほどの位押さえてるんだ？」

ロットバルトの告げた数字に、レオアリスは呆れて口を開いた。

「——お前、俺がどれだけ壊すと思ってるんだ」

「さて。命が幾つあっても足りないと思つた事は何度もありますが」

「——」

自分の所業——大抵記憶が余り無いところが余計怖い——を思い返し、レオアリスは肩を落とした。やはりまだ今一つ確信が持てない。

「やっぱ、二刀はよすか……」

「ご随意に」

「……本題。見せたいものがあるって言ってたろ」

ロットバルトは頷いて、すぐそこにある重厚な扉を示した。

「そうでした。どうぞ中へ」

王立文書官の扉を押し開け、正面の机に近づくと、スランザールがいつものように書物に突っ込んでいた顔を上げる。

「ふむ」

それだけ呟いて立ち上がり、ちょこちょこ二人に近寄る。

「少しは成長した顔をしておるの」

スランザールは首を伸ばしてレオアリスの顔を覗き込み、そう言ってみせやりと笑った。

「成長したかどうかは判んねえけど、まあ少しは変わったつもりだよ」

「己の自覚はその程度が程良いものじゃ」

普段国内随一の知恵者と自ら公言して憚らない老公はそう言うと、ロットバルトへ顔を向けた。

「お前も、ましな顔になったの」

皺枯れた声でカラカラと笑うスランザールに対して、ロットバルトはただ笑みを返し、一礼しただけだ。レオアリスはその顔を眺め、スランザールに視線を移す。スランザールは王立学院の院長も兼務している。

「そうかもな……。学院生時代はどんなだったんだ？」

再び興味が湧いてそう訪ねると、スランザールは口元を尖らせた。

「つまらんヤツじやったわ。わしの会心の問いを全部解いてしまえよ。」

しかも解答が実利一辺倒で全く面白みがない。不可をやるうかと何べんも思ったが、周囲が煩く止めるのでう」

「それは残念ですね。正当な評価を戴く機会を逸していた訳だ」

嫌味とも素直な感想とも判別しにくい物言いに、スランザールは眉を盛大に寄せた。

「ふん。して、今日は近衛が二人も揃って学問の聖域に何の用じゃ。わしの教えを聞きたいと申すのであれば、特別に時間を割いてやらない事もないが」

「いえ。それはまた次の機会に」

さらりと否定され、スランザールの皺顔がさらにくしゃくしゃと寄った。

「閉架を見せて戴いても？」

文書官の開架は十数万冊の文書量を誇るが、整理途中や分類前、そして持ち出し不可の貴重な書物を含む閉架は、更に開架の数倍の規模になる。基本的に申請さえ行えば、希少本以外は誰でも閲覧が可能だ。

「ふむ、まあ良いじゃろう。……大戦のか」

「そうです。以前と同じ場所ですか」

「あそこら辺は変わつたらんよ。……くれぐれも言うときが、整理を付けていない訳ではないぞ。他をやつとるだけじゃ」

「じいさんの場合、すぐ読み耽るからじゃないのか？」

レオアリスが口を挟むと、スランザールはじろりとその顔を睨んだ。

「スランザール様と言わんか、小僧。大体お前のような不勉強者の孫を持つた覚えはないと」

レオアリスが肩を竦める横から、ロットバルトが付け加える。

「貴方と上將の祖父君は、良く似ておいでなんですよ」

スランザールの皺顔が、何とも表現しがたいほどくしゃくしゃになった。

「……ふん。勉強せえ」

スランザールはくるつと後ろを向くと、さつさと机に戻り、再び書物に首を突っ込んだ。

「似て……るけど……まあ」

レオアリスも照れくさそうに、片手で黒髪を交ぜた。ロットバルトは可笑しそうに笑い、レオアリスを案内して机の奥にある扉を開ける。

扉の向こうはすぐ左右が階上へと続く短い石段になっていて、それを上るとまた長い廊下があった。内側の壁には、幾つもの扉が一定間隔に設けられ、書物の分類名と数字が振られている。

「こんな場所あったのか……」

レオアリスが感心して見回していると、ロットバルトが足を止めずに振り返る。

「学院の関係者にはありふれた場所ですが、一般の閲覧者は余りここまでは入りませぬ。開架で足りない程深く調べようとする者位です」

ロットバルトの言うとおりに、僅かな距離を歩く間に、学士らしき女性と一度擦れ違った。頻繁に使われているのだろう。ロットバルトはしばらく歩いてから、一つの扉で立ち止まった。扉の表記は、史書だ。

扉の向こうは天井が三階部分まで吹き抜けになった広い部屋で、壁一面の書棚の他に、十数基の書架が二列にずらりと並んでいる。

「すげえ……」

こんな部屋が幾つもあるのかと、レオアリスは手近な書架に寄り、書物の背に視線を流した。古いもの、新しいものがまちまちに置かれ、背表紙に標題の無いものも多い。

ロットバルトは並んだ書架の一つを選んで入ると、背表紙の表記を確認しながら歩き、やがて立ち止まった。取り出したのは一冊の幅広い書物だ。部屋の中央に戻り、設えられている卓にそれを置いた。

近寄って見ると一見しただけでもかなり古い造りで、表紙の装丁や縁が所々擦れている。

「彼の名前を聞いて、以前これを見た事があったのを思い出しました。子細な表記はありませんが……」

「——」

レオアリスは一旦ロットバルトの顔に視線を向けて、また書物に落とし静かに息を吐く。

多分、その事なのだろうと考えていたのだが、目の前に見せられて改めて、書物が残されていたのだと感慨を覚える。

レオアリスはゆっくりとそれに触れた。特別な感覚が伝わってくる訳でもなく、乾いてかさついた古い紙の手触りがあるだけだったが、それでも心臓の鼓動が早まった。

指先がすぐにそこを開いたのは偶然だろう。

年代記といふべきなのか、淡々と起こった出来事だけを記しているものだ。時折小さく絵が添えられている。

その項に書かれているのは三百年前のバルバドスの大戦の記述で、文章

を眼で追えば幾度も、その名が浮き上がるように飛び込んできた。

戦場の記録。月日と場所、布陣や戦果、そうした事務的な記述の中の、温度を持って感じられる名前。彼が戦場に有ったのは、大戦が終結する直前の、ほんの数年間のようなのだ。

幾度か項を繰った後、レオアリスは挿絵の一つに引き寄せられるように視線を落とした。

彩色のない小さな挿絵で、何処かの戦場に、王の姿が描かれている。その横に一人の青年が立っていた。

顔までは見えないが、背格好、そして手にしている飾り気のない長剣は、レオアリスのそれに良く似ていた。

大戦の剣士——。今までただ歴史の中で聞くだけだった名が、自分と関わりを持つのは不思議な感覚だ。

声に出さないままに名を呟くと、胸の奥が静かに騒めく。右手を上げ、軍服の上から胸に掛けた飾りに触れた。

僅かに躊躇い、それから、自分の耳にも届かないほど微かに、もう一つ、別の呼び方を呟く。

「——父さん」

現実感は少し薄い。それでも、胸の中に震えるように、暖かい火が灯るような気がした。

レオアリスはそれを噛み締めるように瞳を閉じた。

「……もう少し探せば、色々と記述は見つかるかも知れませんね」
彼の——ジンの事は伏されている訳ではない。ただ記憶の中に埋もれているだけだ。辿っていけば、判る事は少なくないのだろう。

「——時間が出来たら、聞いて回るか」

村に戻って、祖父達に聞く事もできる。近づく事は可能だ。

「居たんだもんね」

鳩尾に手を当てる。

自分の裡に在る、穏やかなもう一つの鼓動が感じられる。

父と母、二人から受け継いだ剣の鼓動。

それはこの先ずっと、レオアリスと共にある温もりだった。

三

太陽は日ごとに地上に近づき、風も吹く向きを変え、北から冷たい空気を運んでくる。

ただ、空は見事に晴れていて、低い陽射しが大気を暖めていた。

演習場を抜けていく冷えた風に、レオアリスは一度瞳を閉じた。

静かに息を整え、瞳を上げる。

演習場を取り巻く観覧席とそこにひしめく大勢の視線が、演習場の中央に立つレオアリスへと注がれている。

その正面の高い位置に、王の座す玉座があった。

すぐ下の席でアスタロトが手を振るのが見え、レオアリスは口元に苦笑を浮かべた。

(あいつ、何を暢気に観覧してんだ。俺のひとつ後じゃねえか)

この後にアヴァロンの演武があり、最後にアスタロトが正規軍將軍としての演武を見せる予定だ。その二人の演武はレオアリスにとっても楽しみの一つでもある。ゆっくり観るためには、まずはこの場を問題なく乗り切る必要があるが、今はそれもあまり気にしてはいなかった。

(ま、後処理は頼んでるしな)

レオアリスは一礼すると、右手を鳩尾に当て、剣を引き抜いた。

青白い光が演習場に満ちる。

現れた長剣に、ざわめきと溜息が場内に広がった。

その響きが消える前に左手を上げ、再び鳩尾に当てる。

ずぶりと、沈む。

場内が息を呑む。

力が、身体の内から吹き上がってくるのが感じられる。その力に靡くように、レオアリスの纏う長布が翻った。

深い呼吸と共に、一息に引き抜く。

解放、尊厳、意志。

レオアリスの瞳が王の姿を捉える。

左右の剣が呼応するように、眩い輝きを放った。

二本の剣が空を切り裂き、時折呼び笛のような高い音を立てる。広い演習場で、レオアリスが二本の剣を操る。

静から、一転して動へ。

風を巻くように空を切り裂き、空で止める。黒衣が動作に合わせて翻る。舞という響きから想像される優雅さは少ないが、剣が青い尾を引いて大気を切り裂く様は、だがやはり、見る者を惹き込む程に美しかった。

「満足」

身を乗り出すようにその動きを眺めていたアスタロトは、言葉どおり満足そうに息をついた。御前演習が行われている第一演習場には多くの諸侯が列席し、この演目に言葉を忘れて見入っている。

視線の先のあるのは、レオアリスに対して意欲のある者にさえ、それまでの批判を一時忘れさせる光景だ。

「二刀の剣士か……」

感嘆して呟く彼等の顔をちらりと眺めて、アスタロトは笑った。

その存在は、王国にとって悪い事ではない。

視線を演習場へ戻す。アスタロトはまだレオアリスとゆっくり話をしているが、聞きたい事への答えは全て、視線を注いだ先にあった。

「良かったですね」

傍らのアシアが穏やかに笑う。その言葉が何に向けられたものなのか、敢えて確認する必要はなかった。

「うん。——これからまた、楽しいな」

王は拾い上げた赤子を、その村に預けた。名を与え、いずれ成長した時に、望むのであれば、自らの元に来させるようにと。

それが復讐の為であったとしても、落胆する事はなかっただろう。

剣士とはそういうものだ。

自らが守ると決めたものの為の、剣。

だが、レオアリスは仕える事を望んだ。

そうなると、不思議と過去を知らせる事に躊躇いを覚えるようになる。いずれ過去を知った時、この剣はどこに向くのか？

自分にか、それとも。

その剣を恐れた訳ではない。例え四大公であっても、自分を殺し得る事はできない。

ただ、剣士にとって主を得る事がその最大の喜びであるように、自らの為の剣を得る事は、その者にとっても喜びだろう。

であればこそ、その剣を失う事に、躊躇いを覚えたのだ。

明確な言葉で言うのならば、絶対の信頼、を。

バインドがレオアリスの前に現れた時、王は僅かに自問した。伏せ続けるか、全てを明らかにしてみせるか。

だが敢えて、レオアリスが自ら知るままに任せた。

その剣が何を選ぶのか、干渉を与える事なく、それを見てみたいと思ったのだ。

今——全てを知ったレオアリスの瞳の中に、今までと変わらないそれが見える事に、僅かに安堵している自分に苦笑する。

『いずれ得られるだろう、王よ。貴方なら』

時は思わぬ方向へ流れる。

淡々と流れていく時の一幕一幕は、意外と興味深いものだ。

レオアリスが剣を納め、その場に片膝をつく。黒衣がその身体を追って、

ふわりと落ちた。王の高座に対して一礼すると、水を打ったように静まり返っていた場内に、歓声が響く。

王が立ち上がると、場内は再び静まり返り、その言葉を待った。

「——見事な剣舞であった」

低い静かな声が朗々と演習場内に響き、レオアリスが一層深く頭を下げる。

「先のバインドとの一戦によって、そなたは名実と共に、この国に於いて比類無き剣士となった。——我が名付け子にして、我が剣士。そなたを得た事を誇りに思う」

場内に満ちた驚きが、すぐに波のような歓声に代わる。

（——最高の、後ろ盾だ）

アスタロトが笑みを浮かべる。

王自ら、諸候の前でそう告げる事の意義は計り知れない。

（……まあ、あいつにはそんな事どうでもいいかな）

レオアリスの頬に浮かんだ、誉められた子供のような喜びの色を認め、

アスタロトはもう一度、満足そうな笑みを浮かべた。

四

「それで、王から下賜されたのが、それ？」

アスタロトはレオアリスの執務机の前に椅子を持ってきて腰かけ、机に置いた腕の上に顎を載せたままそれを眺めた。レオアリスが頷くのを見て、さすがのアスタロトも乾いた笑いを洩らす。

（はは。何考えてんだ……）

机の上に載せられているのは、見事な細工の施された、一振りの長剣だ。

鞘に彫り込まれた紋様、使われている地金、黒檀で加工された柄。

鞘から出さずとも、刀身が完全な美しさを以って鍛え上げられているだろう事が容易に想像できる。

拝領してから既に三日。ずっとこうして、執務室の机の上に置かれている。

「……しまっとけば？」

「うん」

アスタロトの言葉に頷くものの、レオアリスは非常に複雑な表情で剣を眺めたままだ。

（——だめだな、こりゃ）

噴き出しそうになるのを堪えてアスタロトは席を立った。

「もう、お帰りですか」

「うん。ちよつと見たい気もするけど」

ロットバルトが執務室の扉を開けると、アスタロトは回廊へ出て振り返った。扉の奥に、まだ剣を眺めたままのレオアリスの姿が見える。

「三日か。結構保ったよな」

「でしようね」

アスタロトを見送ってから、ロットバルトはレオアリスの前に戻った。レオアリスは鞘に包まれた剣をじっと見つめている。

「何を考えていらっしやるんです」

「いや、ちよつと、使ってみようかなー、と」

遠慮がちに視線を落としながらも、レオアリスは今にも剣に手を伸ばしそうだ。

「……敢えて言わせていただければ、お薦め致しませんね」

「でも俺なあ。最近結構加減も効くようになったと思わねえ？」

ロットバルトは暫く黙ってレオアリスの顔を見つめてから、薄く笑みを浮かべ、無言で立ち去った。

「……何だそりゃ」

無然とした表情で室内を見回すと、誰も彼も視線を逸らす。

(まづいのか、やっぱり)

でもやはり、使ってみたい。これほどの剣を使わずにただ飾っておくなど、宝の持ち腐れもいところだ。

(まづいかな。折れるか?)

折れる。

いや、折れないだろう。

細心の注意を払って扱えばいい。

たぶん。

折れない。

(……一度、振ってみるだけだ)

レオアリスは期待に満ちた笑みを浮かべて、剣を取った。

「うーん、上將の考えてる事は分りやすいな」

執務室を出るレオアリスの姿を目で追いつつ、クライフは両腕を頭の後ろに組んで背もたれに寄りかかった。同意を求めるように、隣席のヴェルトールに顔を向ける。

「顔に全部出てるからな」

「賭けるか？」

「お前が折れない方に賭けるならね」

「有り得ねえ」

「百でどうかな？」

「有り得ねえつつつてんだろ」

「じゃあ五十」

「しつつけえなあ！」

二人のやり取りを聞きながら、ロットバルトはグランスレイの席へ行くど、書類を机の上に置いた。

「……お止めになるなら、今ですが」

グランスレイは渋い表情を浮かべ、息を吐いた。その様子に、フレイザーが翡翠の瞳を閃かせて笑う。

「――仕方ない。鍛冶師には、全員で頭を下げに行くでしょう」

(2007.9.1 校一)